

猫
三
題

渡り猫の日
猫の国・夢の国
夜半の来客

36 19 3

夜半の来客

寝る前に読みかけの本をもう少し読んでおこうかと、居間のソファに座ってページをめくっていたら、ドアのチャイムが鳴った。こんな非常識な時間にドアのチャイムを鳴らすなんてきつとろくな用件ではないだろうと無視していた。するともう一度チャイムが鳴って、それから細かい声が聞こえた。

「紙野さん。こんな時間にすみません。お願いがあったって来たんです」
そうまで言われて無視するわけにもいかないと思って、玄関に行くとドアスコップをのぞいてみた。誰もいない。いたずらだったのかなと思つてドアを開けて辺りを見回してもやはり誰もいない。おかしなことがあるなと思つて右足のすねをひつかかれたような気がした。下を見てみると白と黒のブチ模様の見慣れた猫がいた。
「なんだ。ブチじゃないか。チャイムを鳴らしたのはお前かい」
「そうです。夜遅くにすみません。でも紙野さん、いつも帰りが遅いからこんな時間にしかこられなくて」
「ふうん。何か大切な用事みたいだね。ここで話していたら近所に迷惑だから中に入りなさい」
「はい。失礼します」

その猫ははだしの足が汚れていないかと気にするようになり、ドアマットのところで少し立ち止まってから、ゆっくりと居間に入ってきた。

「そのソファの上に座りなさい」

「はい」
そう返事をして猫はソファの上に飛び乗った。前足を揃えて行儀よくこちらを見つめている。

「何か飲むかい。ああそれとも食事がまだなのかな」

「水をください」

「水ね」

台所に入って深めの皿を探してそれにミネラルウォーターを注いだ。その皿を猫の前のテーブルの上に置く。猫は音を立てずにしばらくその水をなめている。

「ごちそうさまでした」

「もういいの。ミルクの方がよかったかな」

「水がいちばんおいしいんです」

猫は少し背筋を伸ばしたように見えた。

「いつも食べ物を持ってきていただいてありがとうございます。弟と妹がお世話になっていきます」

「いやあれは僕が自分だけで気になつてしていることだから」

その猫はほかの二匹の猫と一緒にこのマンションの裏のせまい隙

間に住み着いて、ときどき僕やほかの誰かにえきをもらっている。年齢は子猫ではなくて青年期とも言ったところなんだろうか。それくらい体格だ。

「で、今日は何の用なの。お願いがあるって言ってたけれど、僕が何か役に立てることってあるのかな」

「はい。実は僕、就職するんです」

「就職？」

「はい」

「猫が就職すると言うことの意味がよくわからない。

「誰かの雇われペットになるのかい」

「はいえ。もつとちやんとした働く仕事です」

「ふうん」

猫が働くと言うことがどういうことなのかよくわからない。誰かたちの悪い人間が猫をからかっているか、それともこの猫がかわいそうに何かの妄想を抱いてしまったかのどちらかなのかも知らない。誰かと思った。

「具体的にはどんな仕事なの」

「流通です」

「流通」

「倉庫で商品の出入りと在庫を管理するんです」
要するに倉庫番のことを流通というなんて、この猫は勘違いして
いるかそれとも無意識の気取りがあるに違いない。
「よく仕事が見つかったね」
「はい。就職情報誌を見て電話で話したら、君は良さそうなひとだ
からすぐにでも来てもらいたいって言われました」
「君は電話がかけられるの」
「はい。ボタンを押せばつながりますから」
「電話はどうしたの」
「落とし物の携帯電話を使っています」
なるほど。携帯電話で話ができれば用事は足りるわけだ。就職と
いうのもずいぶん簡単になったものだ。
「それで僕は何をすればいいのかな。就職が決まったんなら、職を
くれとか食べ物や物をくれということではないよね」
「はい。実は履歴書を書いていただきたくて迷っています。それとできれば
保証人になっていただきたいんですが。迷惑はおかけしません。約
束します」
「履歴書と保証人」
「どうして猫にそんなものが必要なのかがよくわからない。猫なん
だからそんなものにこだわる必要はないんじゃないか。それとも猫

とはいえども社員は社員なんだからと言う極度の形式主義なのだろうか。それで思ったとおりのことを言ってみた。

「ずいぶん形式にこだわるんだねえ」

「はい。僕もそう思ったんですが、規則だからちゃんとしてくれと言われました」

「履歴書ねえ。書いてもいいんだけど君は自分では書けないか」「はい。こんな前足ですから。ワープロなら使えるんですけど」

「なるほどね。それじゃペンが持てないものね」

この猫の前足ではどう考えてもペンは使えないだろう。しかしそもそも猫が字を書くというのはどういうことだ。ワープロが使えるというのはどういうことなんだ。

「それじゃ履歴書の用紙はどこにあったかな。何しろ何年間もそんなもの書いていないからなあ」

「紙なら持つてきました。それからボールペンも」

猫はそういうと背負っていたナップザックを肩からはずしてテーブルの上において、口でファスナーを開けて中から折りたたまれた紙をくわえだした。実に器用だ。

「紙と、それから、ボールペンです」

「ふうん。猫用の履歴書ではないんだねえ。普通の用紙だ」
「猫用の履歴書なんてありませんよ」

「それもそうだ。えーと、順番に書いていくか」
「お願いします」
猫の履歴書はどう書けばいいのか。そもそも猫に履歴というものはないのでから書きようがないんじゃないか。
「名前はと」
「京野ブチです」
「名字があるのか」
「はい。以前飼われていた家の名前です」
「どんな字を書くの」
「京都の京に野原の野です。ブチは片仮名です」
「年齢は」
「五才です」
「おいおい。五才だと人間ならまだ子供だよ。働くなんて無理じゃないか」
「でも僕猫ですから」
「ああそうか」
「住所はと、このマンションと言うことになるのかなあ」
「そうしてください」
「でも君の部屋というのはいないんだからそれだと住所にならないよ」
「あの、それは、紙野さんのこの部屋に住まわせてもらっているこ

とにしていただけないでしょうか。形式的に言うことで。住所不定だと就職できないんですよ」

「それはかまわないよ」

「ありがたいごさいます」

「そう書いてみたものの、今やっているのは有印私文書不実記載ということになるのかなあとふと考えた。」

「さてと履歴の欄なんだけれど、生年月日」

「平成十一年の五月十五日です」

「何でそんなことを猫が覚えているのだ。」

「それからえーと。学歴」

「ありません」

「そりやそうだった。でも君は字が読めたり電話がかけられたりするんだろ。どこで覚えたの」

「ひとがやっついているのを見て覚えました」

「ふうん。失礼だけれど君は化け猫というやつなのかなあ」

「化け猫じゃありませんよ。猫って普通みんなそういうものなんです」

「じゃ人間が気がつかないだけか。それからえーと、働いたことはあるかい」

「ありません。今度初めて就職するんです」

「そうそうそうだった。するってえと、あれえ」
「何か問題がありますか」
「これを見てごらんよ。平成十一年五月十五日誕生、そして現在に至る。こんな履歴書見たことないよ」
「でも人間の子供ならそういう履歴書になるんじゃないですか」
「君の年齢なら幼稚園在学中ぐらいは書けるよ」
「そうですか。でも僕猫ですから」
「何だか変なことを引き受けちゃったなあと心の中でため息をついた。」
「ええと資格免許」
「ありません。働き始めて余裕ができたなら何かの資格を取りたいと思っと思っていますけど」
「それから趣味」
「昼寝と散歩ですね」
「そういうのは今どきめずらしいねえ」
「猫なんですそれが日常なんです」
「ふうん。特技は何かある？」
「飛んでいるゴキブリを捕まえて食べられます」
「それは書かない方がいいなあ」
「どうしてですか」

「君は猫だからわからないうけれど、ゴキブリって言う言葉を見ただけで不快感を覚える人間って多いんだ」

「そうですか」

「最後に家族の欄だ」

「妹がミケで弟がクロです」

「あの二匹とは兄弟だったんだねえ。それにしても毛並みが似てないけど」

「父親が違います」

「ああそう。こりや無神経なことを聞いちゃったな」

「いえいいんですよ」

できあがった履歴書を見てみると、思った通りこんなものをわざとわざ書いていったい何の意味があるという代物だった。何だか馬鹿にされていいるような気がする。

「これでいいのかなあ。ほとんど真っ白だ」

「十分です。どうもありがとうございます」

「それとこれはえーと、写真は貼らなくていいの」

「何」

「写真を撮っていただけじゃないでしょうか。いえあの、近くのコンビニの前に証明写真の機械ありますよね。あれで撮りたいんですけれど」

ど、僕だけじゃうまくいかなくて」

「お金がないの」

猫が少し憮然とした表情をしたような気がした。

「お金はあるんです。でも僕猫だから機械がうまく使えないんです」
「そうかそうか。じゃついでだから今から撮りに行こうか」

「ありがとうございます。これ、お金です」

猫はナップザックの中から五百円硬貨を口にくわえて取りだした。その硬貨を受け取ってポケットに入れる。

「じゃ、出かけよう」

マンションの外に出るとあたりはすでに深夜である。暗い街灯のついた道を猫がとことこと歩いて行って、そのあとをついていく。猫が礼儀正しい感じでいろいろとやっているけれど少しばかりつまづいて、まわっているような気がしないでもない。

「誰も使っていないみたいですね」

「ええと。これがうまく使えないってどういうことなの」

「椅子が低すぎるんです。僕が座ると届かないんです」

「これはさあ、こうやって回せば高さが調節できるよ」

「ああそうか。乗ってみますね」

猫は椅子の上に飛び乗って前足を揃えて座った姿勢になったけれども、なるほどこれでは低そうだ。

「これだと写らないですよね」
「ちよつと待っていなさい。何か台を見つけよう」
コンビニの前の隅っこに折りたたまれて捨ててあった段ボールの箱から見つくるつて、組み立てて椅子の上に置いてみた。
「これならどうだろう」
「乗ってみます。えーと、顔が真ん中に映りました」
「それじゃこれでいいか。君の前足だここにお金が入れられないのかな」
「そうなんです」
「じゃ入れるけどね、こういう機械は初めてだろうから少しこつがあるんだ」
「教えてください」
「背筋を伸ばして顔を少し上に向けて、それから少しだけあごを引く」
「こうですか」
「そんなものかな。上目遣いにならないようにね。それじゃお金を入れるよ。フラッシュが光って少しまぶしいからね」
「はい」
硬貨を入れるとじきにフラッシュが光った様子だ。最近の機械と違うのは一回の撮影で四枚同時に撮れるらしい。猫が出てきた。

「できましたか」
「もう少し待たないと出てこないよ」
傍らを通行人が通り過ぎたので一瞬黙った。猫と話していると思われたらとんでもないことになると思っただが、当世は道ばたで大きな声で独り言を話している人はたくさんいるから気にされないのかも知れない。一分ほどで写真が取り出し口に出てきた。
「うまく写っているかな」
「見せてもらえますか。僕ってこんな風に見えるんですか」
「自分の写真は見たことがない？」
「はい。初めてです」
「それだと少し違和感があるかも知れない。誰だってそういうものなんだよ。それじゃ家に帰って履歴書に貼るか」
猫がまた前をとことこ歩いていく。猫の写真を見せられたところ、この猫が写真の猫と同じ猫かどうかなんて普通は気にもしないのに、どうして写真を貼れなんて言う注文をするんだろう。形式主義あるいは事大主義あるいは平等主義。段ボール箱を片づけるのを忘れたな。まあいいか。
「ええと、はさみとのり」
テーブルの上ではさみを使って写真を貼る大きさに切っているあいだ、猫は行儀よくソファに座っている。

「これでいいか。あとの写真も一枚ずつ切っておこうか。就職する
といろいろなことで写真が必要になるから」

「はい、お願いします」

「きつと社員証を作るのに写真がいるんだろなあ」猫に社員証か。
「そうなんですか」

「それじゃ履歴書はこっちの封筒に入れて、写真はこっちの封筒に
入れて、ナップザックに入れようか」

「自分でできます。ありがとうございました」

猫はふたつの封筒を器用にナップザックの中にしまい込んで、こ
れまた器用に口でフアスナーを閉じた。

「さてと、コーヒー飲むかな。君はコーヒー飲めないだろうね」
「はい、猫舌ですから」

暖めっぱなしのポットからコーヒーカップにコーヒーを注いで、
何も入れずに飲んだ。

「保証人がいるんだったつけ」

「そうなんです」

「普通だと親とか兄弟に頼むんだろうけれど、君には無理だろうか
らなあ。ほかに知り合いの人はいなかったの」

「はい、紙野さんしかお願いできる人がいなかったの」

「僕はときどき君たちにえさをあげているだけなんだけれどなあ」

「見ればわかるんですよ。気まぐれでえさをくれているんじゃないかと、この人は本当にいい人なんだなあってわかるんです」

「世間じやそうは思っていないみたいなんだけどもね。ああそうだと、保証人になるって簡単なことじゃないってことはわかるよね」

「はい、そのつもりでお願いしています」

「たとえば君が理由もなく怠けたり会社に損害を与えたりしたら、その責任を僕が取らなければいけないという事なんだよね」

「はい、ご迷惑はおかけしません」

「何か書式があるの」

「そこにおいた紙です」

「ああこれか。上記のもの、誠実な就業につきこれを保証します。こんなのでいいのか。ここに名前と連絡先を書いて、はんこを押すんだね。これでいいか」

「ありがとうございます」

猫はその紙を折りたたんで封筒に入れてナツプザツクにしまった。全部自分でできるのであったか。

用件がすんだので一服しようとしたところで、猫はたばこを吸わないという事に気がついた。まあいいのだ。自分の家なのだから。

「聞きたいことがあるんだけど」

「何ですか」

「君は飽きっぽいということはないのかな。集中力が長く続かないとかさ」

「そんなことありませんけれど」

「ふうん。見てると君たちの仲間はすぐにふいとどこかに行っちゃったりよく大きなあくびをしたりしているけれど、気まぐれっていうことでもないのか」

「そんなことないですよ。ただ野生で生きていると敏感で敏捷にならなければ生きていけないというだけだと思います」

「そうだそうだ。都会の猫も野生であることに変わりはないんだ。それで聞くんだけれどさ」

「はい」

「何で働こうって思ったの」

「ひとの役に立ちたかったんです。僕たちは人間のおかげで生きていられるんだと思って、恩返しができるいいなと思ってたんです」

「恩返しねえ。僕なんかだと君たちを見ていてだけで、ああここはまだ猫が暮らしていける街なんだなあと思っただけです」

「ね。それだけでも君たちは役にたっていると思うよ。就職するといろいろと不自由な思いをしなければならぬし、猫だからできませんで言えなくなるしね」

「でもただいだけだしたら、生まれてきたかいがありません」

「君の考え方は尊重するつもりだけれど」
「ありがとうございます。それじゃ遅くなりましたのでそろそろこの辺で失礼します」
猫はナツプザックを背負ってソファから降りた。
「働き始めて落ち着いてからでいいから連絡をおくれ。それから携帯電話は拾いものじゃなくて早く自分名義のを買うんだよ」
「はいわかりました」
ドアを開けると猫はそつと出て行った。猫が廊下を歩み去るのをしばらく見ていた。猫はエレベーターが使えるんだろうか。
ドアを閉めてカギをかけて居間に戻ると大きなあくびが出た。そろそろ寝ようかと思つてパジャマに着替えている途中で初めて、猫が人間の言葉を話していたの気がついた。それともこつちが気がつかないうちに猫の言葉を話していたのかも知れない。時計を見るのと深夜もすでに遅かった。今日はきつと猫になつた夢を見るだろうなと思つた。

猫の国・夢の国

猛獣は午後のまどろみから何かの気配で目を覚ました。

「ねえ。おじさん。大きい猫のおじさん」

どこからその小さな声が聞こえるのかしばらくわからなくて、猛獣はあたりを見回した。

「ねえ。おじさん。おじさんのごはん、少し食べていい？」

見下ろしてみるとかたわらにとてもちいさな猫の子供がいる。

「おや。君はどこから入ってきたんだい？」

「僕とてもおなかがいっぱい。おじさんのごはん少しだけ食べていい？」

その子猫は毛並みが荒れていて、爪のあいだから血がにじんでいく。自分の空腹以外のことを考えることができないせいか、えさを食べることにしか関心がないらしい。

「いいとも。おじさんはもうこんなにたくさん食べられないからね」
猛獣がそう返事をすると、子猫は大変な勢いで猛獣のえさの残りを食べ始めた。その小さい体のいったいどこにそれだけの食べ物が入るかというほど、夢中でえさにかぶりついていく。この子猫はきつと相当のあいだえさを食べる機会がなかったのだらう。

「あわてなくてゆっくり食べていいんだよ。誰もえさを持って行かないからね」

子猫はそれでも必死になって食べられるだけ食べようとして、えさを食べるのをやめない。あまり一度にたくさん食べると体によくないことを知っているので、猛獣は少し心配になる。

やがて子猫はえさを食べ終わるとおおきなあくびをした。

「ねえ。おじさん。僕とても眠いんだ。おじさんのおうちで寝ていい？」

食べられるだけ食べたなら今度は寝ることにはしか関心がないらしい。きつとこの子猫は相当疲れて飢えていたのだろう。

「ここで寝ると人間に見つかってしまふよ。そうだな。そっちの草むらの中で眠りなさい。そこなら誰にも見つからないよ」

「うん」

子猫はとことと草むらの中に入って寝る場所を見つけると、そこに横になってすぐに眠りについてしまった。この子猫はきつと長い道のりを歩いて疲れているのだろう。猛獣は子猫の荒れた毛並みをおおきな舌でそつとなめた。

それから猛獣はおおきなあくびをして、また元のように眠りについた。

「おじさん。こんにちは」
数日後、猛獣が午睡から目覚めると、先日と同じように子猫がどこからともなくやってきた。
「こんにちは。また来たね」
「ねえ。おじさんは大きい猫のおじさんだよ」
猛獣はその子猫が自分を猫の同類だと信じて疑わないので少しおかしい気分になる。
「おじさんはライオンだよ」
「ライオンって何？」
「君たち猫に近い仲間だが、猫ではないんだ」
「でもおじさんはおかあさんと同じにおいがするよ」
「そうだろうねえ。でもおじさんは猫ではない」
「よくわからない」
「同じにおいがするなら仲間だと思っていいよ。おじさんは大きな猫だ」
本来は人間だけしか自由に出入りできないこの場所に、この子猫はどうやって入ってきたのか考える。
「君の名前はなんていうの」
「名前って何？」
「そうだな。君のおかあさんは君を何て呼ぶんだい？」

「えーと。おまえって呼ぶよ」

「それは名前ではないんだ。君は三毛猫みたいだからミケ君と呼ぼう」

「三毛猫って何？」

「君の体を見てごらん。白と黒そして明るい茶色の毛が生えている。そういう猫は三毛猫と呼ぶんだ」

「ふうん」

子猫は自分の体をながめ回している。

「ミケ君。君はどこから来たんだい？」

「僕ね、新宿から来たの」

「新宿？ ずいぶん遠いところから来たんだね」

「うん。おじさんとおばさんに言われたの。おまえはここでは生きていけないから東に行きなさいって」

「東？」

「お日さまが出てくる方だって教えてくれたの。だから僕は東に向かって一生懸命歩いたんだよ。歩いて歩いて、道を渡って川を渡って、歩いて歩いて、ひとがたくさんいたよ。歩いて歩いて、寝て、ごはんを食べて、歩いて歩いて、お日さまがいつぱい出たよ。そしてお日さまがいつぱい沈んだよ。僕は歩いて歩いて、お日さまが出てくるのを待って、あのね、自動車がたくさんいたよ。大きな

水たまりがあつたの。そうしたらおかあさんのおいがしたの。お
かあさんのにおいがする方に歩いたんだよ。せまいところを歩いて
暗いところを歩いて、そうしたらおじさんがいたの」

この子猫は何かの事情があつて住み慣れた新宿を離れてここにや
つてきたのだらう。こんなに若い猫がよくここまでひとりで歩いて
きたものだ。

「ねえ。ここはどこ。東つてまだずっと歩くの？」

「ここはね、上野というんだ。東というのはずっとずっと遠いところだ。いくら歩いてもたどり着けないかもしれない」

東というのは場所のことではなくて方角なのだというような難しい説明が子猫に理解できるはずがない。

「僕はまだずっと歩くの。僕、足が痛いんだ」

「足が痛くなくなるまでここにいていいんだよ。おじさんのえさも好きなだけ食べていいよ」

ここは檻の中でいわば衆人環視で、監視カメラもあるというのにどうして子猫が人間の目に見つからずにいられるのか、猛獣には見当がつかない。

「ミケ君、君はどうして新宿から東に向かって歩き続けたんだい？」

「あのね、おかあさんがいなくなっちゃったの」
「いなくなつた？」

「あのね、おかあさんは自動車に引かれちゃったの」
 「自動車に引かれたのか」
 「あのね、おかあさんはいつも、自動車には気をつけなさいって言
 つていたの。でもおかあさんは自動車に引かれちゃったの。大きな
 道路の向こう側に行こうとしたら、自動車がおかあさんにぶつかっ
 たの。おかあさんは眠っているみたいだった。それからたくさん自
 動車がおかあさんの上を通って、おかあさんはぺっちゃんこになっ
 ちやったの。お話ししなくなっちゃったの」
 「お話をしなくなっちゃったの」
 「おかあさんはかわいそうだねえ」
 「あのね、僕もおかあさんにごはんをもらって食べたの。でもお
 かあさんがいなくなっちゃったから、僕ごはんが食べられなくなっ
 ちやったの。おかあさんみたく猫のおじさんとおぼさんが、東に行き
 だ、ごはんがないの。だから猫のおじさんとおぼさんが食べられるとこ
 なさいって言ったの。東に行けばいつでもごはんが食べられるとこ
 ろがあるって。だから僕一生懸命歩いたんだよ」
 「おじさんとおぼさんは東に行きなさいって言ったんだね」
 「うん。ねえ、おじさん、ここは東じゃないの？」
 「東ではないね」
 「じゃあまだ僕はごはんをたくさん食べられないの？」

「おじさんのえさなら好きだけ食べていいよ。でも人間に見つかつたらきつと君はここにいられないね。だからいつかは自分でごはんを探せるところ、寝られるところを見つけてなければいけないね」

「それじゃあ僕はここで東を探してみる。でもおなががすいたら僕はおじさんのおうちに来たい？」

「うん」

「でもえさの時間になって人間の飼育員さんがここに来るときには、どこかに隠れていなさい」

「うん」

それから猛獣は大きなあくびをした。

「ねえ。ライオンのおじさんはどこから来たの？」

「子猫は食事をした後に無邪気に猛獣にたずねる。」

「おじさんはね、アフリカから来たんだ」

「アフリカってどこ？」

「日の沈むほう。ずっとずっと遠いところだ」

「新宿よりも遠いの？」

「ずっと遠いところだよ」

「おじさんはアフリカから歩いてきたの？」
「歩いてきたんじゃないよ。とても遠いところだから歩いては来られ
れないんだ」
「じゃあどうやってきたの？」
「おじさんは飛行機に乗ってアフリカから来たんだ」
「飛行機って何？」
「空を見ていると銀色の鳥が飛んでいるね」
「うん」
「あれが飛行機だ。人間は自動車に乗っているところに行く
ように、飛行機に乗っているところに行くんだ。おじさんは
飛行機に乗せられてここに連れてこられたんだ」
「えーと。それじゃあ僕は飛行機に乗って東に行けるかなあ」
猛獣は子猫の無邪気な質問にどうやって答えたらいいのか考え込
んでしまう。
「猫は飛行機に乗ってはいけないんだ」
「おじさんはライオンだから乗れるの？」
「おじさんも本当は飛行機に乗ってはいけなかったんだ。おじさん
は乗りたくなかったのに無理に乗せられたんだ」
「おじさんは飛行機に乗りたくなかったの？」
「ああ。乗りたくなかった。おじさんはずっとアフリカの草原で生

きていたかった」

「草原って何？」

「ここに草が生えているね」

「うん」

「こういう草が見渡す限りずっと生えている場所だよ。いくら走っても走ってもずっと草が広がっているところだ。おじさんのようなライオンは草原で生まれて草原で生きていくものなんだ」

「でもおじさんは飛行機に乗ってここに来たんでしょ」

「ああそうだね」

「また飛行機に乗ればアフリカに帰れないの？」

「ここに来たときはおじさんはいつでも人間に向かって大きな声で叫んでいたんだ。ここから出してくれ、アフリカに返してくれって」

「人間はおじさんの言うことを聞いてくれないの？」

「おじさんの言葉は人間にはわかってもらえなかった。ずっとこの場所で生きていくうちにいつの間にか大きな声で叫ぶのもやめてしまった」

「あのね。おじさんはこんなに大きいんだからきつとアフリカに歩いて帰れるよ」

「おじさんはここから出られないんだ」
「どうして？」

「おじさんはここから出ると人間に殺されてしまうんだ」

「殺されるって何？」

「君のおかあさんみたいにぺっちゃんこになってばらばらになっていなくなってしまうんだ」

「うう。うわーん」

「おお。ごめんよ。怖いことを言ってしまったね」

「うわーん。おかあさん」

「おかあさんのことを思い出してしまったのかい。ごめんよ。ごめんよ」

猛獣はただうろたえるばかりである。

「おじさん。おじさん」

猛獣が食事を終えた頃にまたいつものように子猫がどこからともなく現れた。

「やあ、ミケ君、こんにちは」

「おじさん、いつぱいおうちを見つけたよ」

「どこで見つけたんだい」

「あのね、あそことね、あそことね、いつぱいあったよ。黒い大きな猫のひとがいたよ」

子猫はどうやらこの動物園の中をあちらこちらと探索していたよ

うだ。

「黒くて大きいのはクロヒョウというんだ。おじさんのようなライオンや君のような猫の仲間だよ」

「それとね、黒と黄色でもようのかいてある大きな猫のひともいたよ」

「それはきつとトラだろうね」

「えーとね、それから人間のひともいたよ」

「人間？」

「いっばい毛が生えていて顔の赤い人間のひとだよ」

「それは人間ではないんだ。それはサルというんだ」

「サルって人間じゃないの？」

「サルは人間の仲間だけれど人間ではないんだ。人間にはサルの言っていることがわからない。それに人間はふつう洋服というものを着ている。ほらあそこにいる人間を見てごらん。人間の体がいろいろな模様をしているのは、洋服というものをつけたり取ったりして

いるからなんだ」

「ふうん」

「子猫は興奮を冷ますのにやや時間がかかっている。」

「ねえ、ライオンのおじさん」

「なんだい」

「どうしてこんなにいっぱいおうちがあるの？」

「ここが動物園だからだよ」

「動物園って何？」

「人間が自分たち以外の生き物を集めて、人間以外にも生き物がたくさんいることを忘れないようにほかの人間に教えるためのものなんだ」

「じゃあ、ヒョウのひともトラのひともサルのひとも、みんなどこから連れてこられたの、ライオンのおじさんみたいに？」

「そうだ。ただこの動物園の中で生まれて育って、ほかの場所を知らない動物もいる」

「おじさんはアフリカに帰りがたかったんでしょ」

「そうだよ」

「何でいやがっているのに、おうちの外に出られないの？」

「こういう動物園というもので人間にたくさんの動物のことを教えないと、人間は動物のことを忘れて動物を殺してしまうんだ。そして動物がいなくなったら人間は人間を殺すようになって誰もいなくなってしまうんだ」

「ふうん」

子猫には人間が動物園を作る理由はまだ理解できないだろうとライオンは考える。

「ねえ。おじさん」

「なんだい」

「おうちにはいつもごはんがあるよね」

「そうだね。飼育員のひとが運んできてくれる」

「僕のおうちが動物園にあったら、僕はいつでもごはんを食べられるよね」

「そうだね。ただおじさんはえさが食べられるからといって、ここの生活がすばらしいとは思わないよ」

「どうして？」

「もう少ししたら君にもわかるようになる。今はまだわからないことだよ」

かつての草原での暮らしがそうであったように、飢えてもなお自由であることがかけがえのないことなのだということ、この子猫にはまだわかるすべもない。

幾日か雨降りが続いた後、子猫がまたやってきた。

「おじさん」

「やあ、ミケ君。しばらく来なかったけれどごはんは食べられていたのかい？」

「あのね、木がいっぱい生えているところに行ったの。四角い石が

たぐさん並んでいるところに行ったの。そこにごはんが少しだけあったの」

「どうやら子猫は動物園から少し離れた谷中の墓地まで遠出をしていたらしい。子猫は行動力を取り戻しつつあるように思えた。」

「それはお墓というんだ」

「お墓って何？」

「人間が、いなくなってしまうたおとうさんやおかあさんやたぐさんの人と話をするところだ。その人たちに食べてもらおうと思って、お墓の前にごはんを置いていくんだよ」

「子猫はそれを聞いてあることを思いついたようだった。」

「ねえ、おじさん。お墓に行けば僕はおかあさんと話ができるかなあ」

「君のおかあさんのためのお墓があれば、話ができるかもしれないね」

「自動車に引かれて死んだ野良猫のための墓というものが果たしてあるのだろうか。」

「ねえ、おじさん」

「なんだい」

「おじさんはアフリカから来てずっとこのおうちにいるんだよね」
「そうだね」

「でもおじさんは、えーと、動物園のほかのひとのおうちのことやお墓のことを知っているんだよね」

「その通りだ」

「このおうちから外に出たことがないのに、どうしているいろんなこととがわかるの」

「おじさんは何でも知っているよ。風のおいをかいでごらん。暖かい風、冷たい風、風のかげやき、風が運んでくる言葉がここの外の世界に何があるのか全部教えてくれる。ここから外には出られないけれど、おじさんには何もかもわかるんだ」

猛獣はしばしのあいだ目を閉じる。子猫が猛獣を見上げている。ある。猛獣は夢を見ている。彼が見る夢はいつもアフリカの草原の夢である。その隣で子猫もまた夢を見ている。子猫の見る夢は母親に甘える夢である。猫の眠りがどのようなものであるかは人間には想像もつかないことで、彼らは夢の中でもうひとつの生を生きているのだ。

「見つけたよ。おじさん、見つけたよ！」
「子猫が興奮した様子で飛び込んできた。」
「どうしたんだい」

よ。いっしょに行こうよ」
「行けたらいねえ。でも前に言ったね。おじさんはここから出ると人間に殺されてしまうんだ」
「それじゃ、僕が連れて行ってあげるよ。猫の国に行つてほかの猫のひとといっしょにおじさんを迎えるよ。いっぱいっぱいくるよ。僕たちが守つてあげるよ」
「それができたらいねえ」
「僕が連れて行つてあげるよ。待つてね。きつとだよ」
「ああ、ありがとう。元気でね」
子猫は何度も振り返りながら去つていった。
その後この子猫ミケは隅田川を渡つた下町のある団地にたどり着き、雄の三毛猫という珍しい種類であつたことも関係したのか団地の住民にかわいがられ、団地の駐車場の隅に住み着いて同じく団地の猫である雌猫とのあいだに五匹の子供をもうけた。
猛獣は子猫が去つてから程なく老衰のため世を去つた。最期に彼が思い描いたのはアフリカの草原だつたのかそれともひととき心をなぐませたくれた子猫ミケのことだつたのかはわからない。推定三十歳、野生のライオンに比べはるかに長寿であつた。
子猫ミケとライオンとの約束は果たせないこととなつた。

渡り猫の日

事 数日続いた残業もようやく先のめどがついて終電で帰ってき
倒れ込んだ。何十匹も猫の体をひつかれたりなめられたりす
夢を見た。変な夢だ。猫が体にまとわりついてにやーにやー鳴いて
いる。そこで目が覚めた。まだ猫の鳴き声がある。おかしいな。玄関の
方から聞こえてくるような気がする。時計を見ると九時前だ。パジ
ヤマのまま玄関まで行って顔を見上げてみる。黒と茶虎と三毛の三匹
だ。お隣の山本さんの猫だ。
「おはよう。君たちなんか僕に用があるのかい」
「おはよう。黒い猫がとことどこかに歩いていった。そしてまた戻
ってきた。僕を見上げていて。何なかなと思つていたら茶虎も同じこと
をすると思つて見ていたらやっぱり茶虎もどこかに歩いていつてそ
して戻つてきた。」

「ふうん。ついてきてくれっていうことかな。今着替えるからちよつと待つていてくれ」

ポロシャツとジーンズに着替えて外に出ると、三匹の猫はこっちにっついてきてくれという様子でそろって歩き出した。僕の借りている借家から隣の山本さんの住んでいる借家まで徒歩で十六歩。そういえば山本さんのおばあちゃんを最近見かけない。猫たちは玄関の前につくとすわって僕を見上げて「にゃあ」と鳴いた。何だか嫌な感じがする。

「おはようございます。山本さん。隣の紙野です。おはようございます」

返事は帰ってこない。試しに玄関のガラス戸を開けてみようとしたが鍵がかかっていない。縁側の方に回ってみると猫たちもついてきた。縁側のガラス戸も閉まっていた。鍵がかかっている。カーテンが閉まっていた。中の子はわからない。山本さんに何かあったのだと面した。隣人として最低限のことはやらなければいけないのかな。面倒だな。

歩いて五分の表通りにある不動産屋まで行く。大家さんは遠くに住んでいるのでこの不動産屋さんが借家の管理をしている。

「おはようございます」

「おや。紙野さん。おはようございます」
「あの。隣の山本さんなんですかね」
「はい。山本さんのおばあちゃん。どうかしましたか」
「この一週間ぐらいかな、全然顔を見かけないんですよ。僕だって朝に顔を合わせるくらいにだけ、それだっから見かければ挨拶もするし覚えていてはるはずなのにこのところ全然見かけないんですよ。気がなつて今玄関から声をかけてみても返事がないし、なんか様子が変なんです」
僕は本当のことをいうと近所づきあいというのが苦手で、顔を合わせたら挨拶をする以外はつきあいたいことはほとんどしなくて、だけれど、まさか猫に呼ばれたから行って見たなんてことを言えるはずがない。一人住まいの猫好きのおばあさんだということ以外はプライバシーはほとんど気にかけていなかったのだ。
「はあ。新聞がたまっているとか洗濯物が干したままだとかありますか」
「新聞はなかったです。洗濯物も干してなかったです」
「電話してみませんか」
携帯電話らしき番号を押ししてしばらく聞いていたが、返事はなかったみたいだ。

「出ないですねえ。おかしいな」

少し考えている様子だ。

「まあ一応見に行ってみましょう」

不動産屋のご主人は金庫から鍵を取り出して立ち上がった。

「一緒に来ていただけますか」

「はい。特に今日は用事ありませんし」

山本さんの家の玄関の前に戻ってくると、猫たちはそこにすわって待っていた。不動産屋のご主人が声をかける。

「おはようございます。山本さん。表通りの丸島です」

「おや。開いてますね。玄関のガラス戸に手をかける。」

「さっきは鍵がかかっていたはずなのにおかしいなと思ったら、三

毛が玄関の中に入れてこちらを見上げています。この猫がどこから入り

り込んで内側から鍵を開けたのかな。まさか。

「えー。失礼します。入らせていただきますよ」

不動産屋のご主人に続いて僕も中に入る。靴を脱ぐ。家の造りは

僕の住んでいる借家と同じだ。台所があってその隣に六畳の居間が

あってその隣に四畳半の和室がある。

「カーポートはありますね。やっぱり中にあるのかな」

「あ、カーポートはありますね。やっぱり中にあるのかな」

「そうみたいですね。んーと。こちらかな」

同じ作りの借家だというのに僕の住んでいる部屋と比べたらとにかくきちんと整頓してある。しかし何か変だ。この散らかり具合。新聞紙の上に猫のえさの皿が置いてあつて空っぽだ。

「失礼します。開けますよ」

不動産屋のご主人が居間と和室との境のふすまに手をかけて開けた。布団が敷いてあつて山本さんのおばあちゃんが寝ていて、顔の色をみたらすでに絶命しているのがわかる。

「あら。たいへんだ」

のどに手を当てる。脈がない。閉じたまぶたを開けると瞳孔が開いている。もちろん息はしていない。こういう状況だとあまりどたばたするのは問題があるのでそれ以上は手をつけない。

「亡くなつてますね」

「これは困つたな。老人の一人住まいだから気にはしていませんがね」

「山本さんのご親類というのはわかりますか」

「いやあ。娘がいるが絶縁しているみたいな話しか聞いていないんでねえ。それよりも警察に電話しないといけないなあ」

「僕がしまししょうか」

「いやいや、こういうのも仕事のうちだから」

彼が携帯電話で警察に連絡している間に部屋の中を見回してみ
る。血が流れているわけでもないし部屋が荒らされているわけでも
ない。いわゆる事件性はないというやつなんだろう。ふと見ると三
匹の猫が台所からこちらの様子をじっと見ている。

「君たち、現場を保存しないといけないから入ってこないでね」

「紙野さん、あなた誰と話しているんですか」

「いえ。猫ですよ。ほら、おばあちゃんがかわいがっていた猫。そ
ういえば契約書はペット禁止でしたよね」

今そんな話をしなくてもいいじゃないかみたいな顔で彼が返事を
した。

「いやそれはね、山本さんのおばあちゃんは部屋をきれいに使って
くれるからね、それに独り暮らしじゃ寂しいだろうって大家さんと
話して大目に見てたんですわ。ああそうだ、大家さんに連絡しない
と」

彼が大家さんに連絡をしている最中に玄関に人の気配がした。

「ごめんください。警察です」

私服と制服の二人組が入ってきた。

「私、この借家の管理を任されている不動産屋の丸島といいます。
こちらはお隣の紙野さん。なんか様子が変だというので連絡してい
ただきまして」

「するとお二人が第一発見者ということですね」

「はい」

第一発見者というのはこういう場合事件性があるのなら一番の被疑者ということだ。

「では、拝見しましょうか」

彼らは遺体の様子を調べて部屋の様子を調べて何かメモをとっている。

「後ほど正式に検死に参りますので、お話を伺わせていただけませんか」

「はい」

事件性があるともないとも即断はしないみたいだ。

「あのう、いったん家に戻っていいですか。食事していませんよね」

「お隣でしたか。念のためケータイの番号教えていただけますか」

警官に携帯電話の番号を教えて家に戻ろうとすると、なぜか三匹

の猫が一緒についてくる。

「何なんだ君たちは。おばあちゃんを見つけてあげたからもういいんじゃないか」

ふと気がつく。猫に人間の言葉で話しかけている。これは相当疲れているのかもしれない。部屋に戻って探してみたが、数日間買物ができなかった。食料が切れている。コンビニに買い物に行こうとして気がついた。

「ひよつとして君たち、何日間もえさを食べていないんじゃないか」茶虎が僕を見上げて「にゃー」と返事をした。ひよつとして僕のところに来たのはお腹がすいていたからなのかもしれない。

家の外に出ると制服警官が立っていたので「ちよつとコンビニまで買い物に行つてきます」と声をかけた。変に疑われるのも気持ち悪いからここは模範的な市民を演じなければいけない。コンビニで弁当とミネラルウォーターと猫のえさと紙の皿を買って帰つてきた。皿を二つ並べてえさとミネラルウォーターを入れると、三匹の猫は何も言わずに一心不乱にえさを食べ始めた。

「そんなにおなかが減っていたのか。大変だったね」さて、飼い主の山本さんが亡くなってこの三匹の猫はこれからどこに行くのだろうか。僕は生き物を飼えるほどきちんとした性格じゃないことはわかっている。昼間は留守をしているんだし、管理人さんだって僕みたいな住人が猫を飼うのはいい顔をしていないに決まっている。どうしようかな、野良猫になるしかないのかな。猫がえさを

食べている光景を見てふと考えた。猫の味覚ってどんなものなんだ
ろうか。そうつとえさをつまんで一口食べてみた。
うむ。案外うまい。
茶虎が、僕たちのご飯を食べないでとも言いたそうに僕の顔を
見上げて「にやあ」と鳴いた。